

クルアーンの基本構成とクルアーンをめぐる諸問題

1, 『クルアーン』の名称の「音写」と「翻訳」

古蘭経 コーラン Koran Quran al-Qur'ān القرآن

最近では原音重視の慣行により「クルアーン」が普及しつつある

様々な言語への「翻訳」：ペルシア語、トルコ語、インドネシア語

フランス語、ドイツ語、英語、中国語、日本語、等々

本講義のテキスト：『コーラン』上・中・下巻、井筒俊彦訳（岩波文庫）1957-1958年

井筒俊彦（1914-1993年）：慶応義塾大学文学部教授（在職1954-1981年）

イラン王立研究所教授（在職1975-1979年）

イスラーム思想、ギリシア思想、仏教思想、老荘思想、朱子学研究

独自の「東洋哲学」の構築

日本人ムスリム（イスラーム教徒）による「翻訳」

『日亜対訳聖クルアーン』三田了一訳注解（日本ムスリム協会、1996年）

『日亜対訳クルアーン：〔付〕訳解と正統十読誦注解』中田考監訳（作品社、2014年）

2, クルアーンの基本構成

- ・構成要素：唯一神の啓示とされる・・・著者／話者＝唯一神とされる

→ 人間の手による加筆・修正・解説などは入っていないとされる

唯一神は、一篇の首尾一貫したテキストとして『クルアーン』を下したわけではない

啓示は約22年間にわたって折に触れて断続的にムハンマドに下されたとされる

- ・人間の役割（1）＝記憶、文字化、編集

断片的な啓示の文言を記憶し、文字に記録し、書物（テキスト）にまとめる

原則的に新しい啓示を前の方に、古い啓示を後ろの方に配置

→ 預言者ムハンマドのヒジュラ（移住／聖遷、622年）を画期とした啓示の時期区分

初期の啓示＝マッカ（メッカ）啓示

中後期の啓示＝マディーナ（メディナ）啓示

複数の啓示をある程度の内容的なまとまりを基に「章（sūra سورة）」を分ける（全114章）

各章に含まれる一続きの啓示を「節 (Āya آية)」に分ける

後代のクルアーン学者と西欧の「東洋学者 (orientalist)」の仕事

節番号の相違＝グスタフ・フリーゲル版 (1869年)、カイロ版 (1923年)

- ・人間の役割 (2) : 朗唱／読誦 (qirā'a قراءَة)

人間にはなしえない美しいアラビア語の音＝クルアーンが神の奇蹟 (啓示) である証明

「クルアーン (al-Qur'ān القرآن)」＝「朗唱されるもの」→クルアーン読誦学

- ・人間の役割 (3) : 解釈 (tafsīr تفسير) →クルアーン解釈学

西暦7世紀前半のマッカとマディーナで、約22年間にわたって断続的に下された啓示をめぐって、現在に至る1400年あまりの歴史の中で、様々な人々によって編集され、読誦・研究・利用されてきた重層的で歴史的な宗教的テキスト

3, クルアーンをめぐる諸問題

- ・ムスリム (イスラーム教徒) にとっての諸問題：いかに誦むか？いかに読むか？

いかに従うか？

- ・研究者にとっての諸問題：言語・構造・意味の分析、形成過程の解明、利用と影響の解明

非ムスリム研究者の研究成果の大きな影響力・・・ *Orientalism* 「オリエンタリズム」

- ・「翻訳」と「解釈」：アラビア語から他言語への翻訳は不可能？

理由 (1) : アラビア語でなされた啓示を他言語に移すこと＝神の行為への人間の介入

理由 (2) : アラビア語の音の美しさを他言語で再現することは不可能

理由 (3) : 解釈を経ない翻訳作業はあり得ない

→クルアーンの他言語への「翻訳」は別言語での「解釈」「解説」と見なされる